

生命とは何か（新しき世界へ 1971 年 11-12 月号）

G.O.

ダレでも知っていて、ダレ一人知らないモノー生命ーその三つの段階

カンタンに、つづめて云うとー

◎生命には三つの段階がある。

第一は、無限、絶大のひろがり

第二は、そのひろがりとその遠心性のためにある一定の時と処で自ら 2 つに遠心分化する。その分化分枝が交錯、衝突することによってスパイラルが生れる。その第一圏は▽△の 2 極をもつ。第二圏はエネルギー、第三圏は素粒子をつくり、ソレから原子を生じ、ソレが巨大な集りになって天体となりつつツイニ太陽系を生む。数億、数兆、数京の太陽系が不断の創造と生長をつづけてゆく。これが物質、モノ、無機の世界。

第三は、この物の世界の一定の時処において、有機物の世界として始まる。その微細な一部が生物の世界になる。（モチロン自然発生である）。

コレを詳しく説くと、物理・化学・数学を総動員して何年かかかる。ソレを 1 年くらいでやりたい。

ソノため、私は特別な方法を考案しなくてはナラナイ。

×

第一の無限の宇宙には分化がない。

私たちが記憶、思考力、意欲をもち、また理想、永遠の幸福、絶対の健康、最高の正義など云うユメをもつコトが出来るのは、この第一の宇宙ー全在、全知、全能ーを私たちの母胎とし、根元とし、本体とし、血とし、生命としているからである。記憶の無限さはソノ証明である。私たちの記憶は幼年時代以前をハッキリ描いてくれない。にもかかわらず、私たちは、ソレ以前にも、記憶があったコトは否めない。無限の昔、始めなき始めから、終りなき終りまで、記憶があるコトは否めない。記憶は「私」の本体である。

幼年期以前生れる前の記憶がバク然としているのは、第一の宇宙が絶対、無限で、差別相がないから五官でつかめられないのは当然である。未来も同様。第二の世界は物の世界。数億、数兆、数京京々の銀河の世界。相対自然、有限、無常、ユメ、マボロシの世界である。ここにあるスベテのモノは始めあり、終りあり、オモテあり、ウラあり、しかもスベテは動的であり、変化である。これはモノの世界、移り変りの世界、タマユラの世界、無常であるから、無情である。つまり死の世界、無機の世界である。

この無機界から、有機界が生れ、ツイニ、生物が生れる。その一部が人間である。

その人間のうち、無限宇宙の、「我」の母胎、生命の本源である無限を発見するモノだけが全知、全能、全在と自己との同根同一性を確認する。これが古いコトバでは信、意志、サトリ、解脱である。

これが生の意義である。これが生命の三段階の確認である。この確認がない人はミナ入生の無意義さを40、50くらいから感じはじめる。そして時にはイーストマンの如くヘミングウェイの如く自殺する。

これが大宇宙の秩序の自証である。秩序こそ生命である。

だから日々の実生活を秩序づけの手習草紙としないで、幼年期を送ったようなモノは、自分でモノの秩序をつけるコトが出来ないから、自分の室や家、抽出の中や、了タマの中、思想と実行に秩序をつけるコトができない。

(その恐しい実例を最近 Y<58 才>が身をもって示してくれた)

×

生命の三段階

- (1) 無限のひろがり(無始、無終の宇宙)
- (2) スパイラル(▽△両極分化)一無機モノの世界
- (3) 有機物一生物の出現一

一イノチの世界一

この第三の極微世界が一般に云う生の世界(第二は死の世界)、だから死は生の母である。生は第一の宇宙、無限で向って生物が終点相対界から脱却する過程である。

(無限一(神)一が二極一エネルギー一素粒子一元素(原子から星まで)一草木一動物一人間の世界を経て、無限に帰る最後の過程か狭義の生命)。

第一の宇宙の別名一ブラーマン、アータマン、神、精神、アミダ仏、太局、無極、霊、父、ゴッド、無限、無、空一

第二の世界の別名無常、人生、浮き世、カリソメ、マヤ、

×

第二、第三を貫く第一の宇宙の無限無始無終のヒロガリゆく姿の別名は、聖霊、道(タオ)、陰陽、(一陰一陽之謂生)、法(ダルマ)。

第三の世界でこの道、ダルマを説き無上安心を与えるモノを僧、御子、聖人、などと云った。

これで仏法僧、父と聖霊と御子の三位一体がわかる。

×

この生命の三段階を説く東洋哲学の優越の証明は幾千幾万かの東西におけるマクロバイオティック東洋医学による奇跡的治癒と、若がえりと、幸福の自覚や、金星ロケット予言的中などタクサンあるのを諸君のヨク御存じの通り。

◎追記

×

第一宇宙の西洋名はタダ一つ、ゴットあるのみ。

第二の「モノ」の世界は第一の極微の部分、幾何学的の如き存在。しかもソノ中に恒砂の如く億、兆、京々の銀河あり、その一つ一つにまた無数の太陽系がある。

その太陽系の数ある中の一つの太陽の惑星の一つが地球。そのまた一部に30億の人間がいきている。これは相対、有限、無常、微塵の世界であるが人間にして見れば大自然。

西洋人は（インテリでも）この大自然が恒砂（ガンジス河の砂の数ほど）の如く無限に生まれて来る壮大無辺際無限のヒロサに対しては全く盲目である。ソノ話をすると、カレラは恐れ戦く。東洋人は洪然の気とか、安心とか云って喜ぶ。

科学や哲学は、この小さい小さい第二の世界の万有引力から原始の世界までの研究あるいは第三の世界の一微分である人生、人間の世界の研究に没頭して、眼を上げて第一の無限を見るコトはゼツタイにしない。宇宙が無限である、と云うコトは理解できない。だから、カレラの宇宙はこの第2の物の世界であり、カレラの無限は、分析の無限である。

カレラの神はコノ第2の物の世界の王者、独裁者、太陽者、力の巨人（知性や、経済力や、暴力や権力をもつ者）である。つまりカレラノ神は「造物主」と正しくも名付けられている東洋では創造者、タオ（道）、一者、命（ミコト）、宇宙の秩序、ムスビ（産霊）、コトタマ（モノゴトを生み、うごかし、亡ぼし、又創造 re-create する原理、霊）。

つまり東洋では、神は霊（タマ）であり、道であり、イノチであり、ロゴス（コトタマ）であり、カルマであり、ダルマであり、因果律であり、確定性の不確定である。

オモシロイのは西洋の科学や思想や哲学の本の中で、こんな生産的な無限や、絶対や、神についての説明を見出すコトが出来ない事実である。

キリスト教の如きは(ユニバーサリストやユニテリアンも含めて)、第一の無限宇宙を第二の有限相対界にしている。(神を人間化する。名をつけたり、姿を定めたり、キモノまで着せたりしている。ハナハダシキは祈の対象にしている。ジャック・マリタンの如きは神と人との間は銀座のウラ通りの様に一方交通である、と断言している!祈りは頼み放しで、応答がない、と云うのらしい。)

マレニ西洋で第一の無限宇宙の入口を想像するモノ、ユメに見るモノは第一の無限を神秘化する。(弘法の真言密教や、興教の新義真言とはワケがちがう)。そして儀礼や教会をたてる。

フロイトの如きは、この第一の無限宇宙を暗黒の深淵のように、恐怖と罪悪感でながめる。中にはライヒ(Reich)の如き洞察力をもった人もいたらしいが、殺されてしまう。

×

科学は有限、相対、無常の世界に無限、絶対、永遠なるモノを求めると云う欲望の私生児である。イワバ1つのノスタルジイである。永遠に不合理な不可能な空しい努力である。ソレは発展すればするほど、破局を拡大するばかりである。そしてバートランド・ラッセルの如く「現代は狂乱の世紀である」と悲嘆したり、ベルグソンの如く「我々の知識の最

大の特徴は生命についての完全な無知である」と空とぼけたり、シャレタリする。

×

科学以下の医学ナンカになると、さらにアワレである。医学は西洋人の第一の宇宙無限の無知から来る底しれぬ妄想である恐怖を暴力でもってタタキ潰そうとする必死の努力である。

医学は症状を挑戦ととして応戦に大童である。ゼツタイニその根本原因を探そうとはしない。スベテノ症状は自家製であるから、自己を改造するより外に対策はないのに、外因ばかりを探究し、ソレラシイものを全滅しようとしている。全く鏡に写った自分のオゾマシサをボク滅しようとして鏡をたたいているようなモノである。

×

この科学が現代の 30 億人の神であるから、科学や現代人を救うには、ドーシテモ真の神、無限、無、空、絶対ソノモノ(宇宙無限エキスパンション)と、その唯一の大法、無双原理を第二の世界、相対界で発見させるより外はない。

×

ここに新しい科学的研究の意義がある。王や李(一昨年ノーベル賞をとった二人の中国人)のバリティ理論の粉碎の如きはソノ序幕である。

×

要するに西洋人が分析的方法論においてすぐれているのはカレラがスゴイ近視であり精神の完全色盲であるからである。

カレラノ技術のオドロクベキ発展は、自分のウヌボレと、手さきの不器用から来ている。全く表大ナレバ裏もまた大なり、である。

東洋人は他力(第一の無限宇宙の全在、全知、全能に一切を委せて安心している心境)ボコリと、芸術的創造力(第一の無限宇宙と、第 2 の相対世界の根本法則▽△を知っているタメニ、すべてを統一的に大観し、芸術的に表現する万法)に没頭して全てを顧みない、と云うクセがある。

このような西洋と東洋の会合は相互にプラスである。

和魂洋才と云うコトバが三あった。最高の判断力をもって、最大の実行力の原理とせよ。ケンソンをもって、ゴーマンを克服せよ。柔よく剛を制す。

×

最後に一言す。

諸君が、私の PU 化天文学や万有引力否定、バインディング・パワー否定をよく理解できないなれば、諸君は、第 1 判断力しかもっていないのである。

第 1 判断力しかもっていないモノの生活や職業はドレイ、盲従、無批判力者の悲劇のエキストラである。

×

多くの西洋の民衆は第 1 判断力で生きている。ゴク少数の指導者は第 2 判断力を最高の指導原理としている。科学者、学者、政治家ミナ然り。宗教、イズム、社会思想家たちもミナ同様である。つまり快感をバラマク、売りひろめる渡世人である。

巴野から、日本に正食法を学びにとんで来たエクスジャンは、その歓迎会の席上で云った「日本には西洋人のイミテーションが沢山いますネ。ミナサンも私たち西洋人のようですネ。ナゼ諸君はこの偉大な正食と PU を全世界に大声疾呼しないで、自分や自分の家庭だけでやっているのですか?マルデ諸君は西洋人だ……!」

これには私もおどろいた。しかし考えて見ると、モ一西洋と日本のチガイはないようだ。判断力による人間の分類だけがモノを云う。

×

(1961、6.20 朝、森の泉ホテルにて、大掃除をしてから、オフロを浴びて、小鳥の声をききながら)

×

第一の世界は無限の宇宙だから、無限なるモノはミナある一無限の自由、無限の幸福、無限の正義……

第二、第三の極微零細世界にあるモノは全て有限である。

有限の自由、有限幸福銀行、有限法律奉行……だからミナ不自由、不幸、不法、無法。

×

第一の世界は無限の遠心力の宇宙である。

第二、第三は有限の求心力(引力)の世界である。富や、権力や、地位や知識やあらずもがなの腕力、暴力を頼みとする人の世界である。

×

何物にも心を引かれない自由人は第一の無限宇宙の無重力圏の市民である。ああ、無限の遠心力の宇宙の…ヒロビロサ、安らかさ、楽しさ!!!

(小鳥の声、静かな森の朝、朝日の光)

(「新しき世界へ」 No.307 1961 年 7 月号より)